高知県立文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
vol. 114
2026.9

リレー随筆

松谷みよ子 生誕100年を迎えて

瀬川　たくみ

高知県立文学館にて生誕一〇〇年記念「松谷みよ子展・こころの学び舎（や）」が開催される。母は、あの世で奇跡だと喜んでいるに違いない。母の晩年は苦しめられた日々だったから。

実は二〇一〇年に新聞記者から「著作権を壊す仕組に松谷みよ子さんの名が活用されている」との報告を受けた。実際、二〇〇四年頃から出版界やテレビ界等でそれが行なわれていたし、遡れば一九七〇年代からと突き止めたので、それらの複雑さを記者に伝えた。

私は正しい著作権に戻すべく出版社を筆頭にあらゆる著作権のやりとりの場面で努力を続けているが、間違った著作権法を長期に亘り鵜呑みにしている為、役所関係からは「前例が無い」と主張され、今でも母の著作権は軽んじられ続けているのが不思議でならない。

著作権とは個人の権利なので協会と称する場等で著作権者を無視し、著作権使用料を始め、それらの権利を勝手に第三者が介入し取り決めを行なってはならない事に誰も気付かない。

その中での「松谷みよ子展・こころの学び舎」の開催は母の文学を取り戻す大きな役割を持つ。学び舎は私の母への想いであり母の世界。空より高く、海より深く、地平線より広い。「松谷みよ子文学の学び舎」は数えれば十二に及ぶ。その半分ほどが今回展開されるので、じっくりと松谷文学を堪能して戴きたい。

「学び舎」は四七都道府県に展開したいのが私の夢だ。松谷文学に触れてこころを洗う、生きる希望を得る、人の豊かさ、温かさ、潔さ、時には残酷さを知り、己の心を強く磨く。松谷に限らず、梁塵秘抄などの古典日本文学、明治時代から昭和四〇年代に多く出版された児童文学、同じく世界の児童文学を取り戻して書店に並んだならどんなに素敵だろうか。

そうした文学が書店から消されて新人の絵本や児童図書が溢れるようになってしまった。これも間違った条文によるものだろうか。

今回多くの方々に松谷みよ子の作品に触れて戴きその魅力を知ってもらい、それが生きる糧になって戴けたなら心から嬉しい。まさに、数十年間の作家・松谷みよ子の挽回だ。

高知と母の縁は私の祖母、松谷翠の誕生の地だから。母は土佐の血が入っていると良く自慢していた。その地での生誕一〇〇年が開催される事をあの世で大喜びしているだろう。

最後に、数年という長いお付き合いとなった学芸員の福冨様、また新館長の織田様、そして、新理事長の澤田様には、この機を与えて下さった事に心から深く感謝したい。

（松谷みよ子長女／松谷みよ子事務所代表）



平成22年、当館で開催した「松谷みよ子の世界展」で講演をする松谷みよ子さん

次回開催

生誕100年記念 松谷みよ子展 ～こころの学び舎～

令和8年10月17日(土)≫令和9年1月11日(月祝)



酷暑の夏が過ぎ、読書の秋がやってきました。当館では10月17日(土)より「生誕100年記念　松谷みよ子展～こころの学び舎～」を開催します。

松谷みよ子さんは大正15年東京生まれ。昭和26年に『貝になった子供』で児童文学作家としてデビューし、『龍の子太郎』『ちいさいモモちゃん』『ふたりのイーダ』など、児童文学、民話、小説、詩集等、多岐にわたるジャンルで読者の心に残る作品を書き続けました。

高知県は松谷さんにとって母方の父祖の地であり、平成22年に企画展を開催した際にも、「心の底に一匹の魚が棲んでいるように、私の心の底に、土佐、への思いが棲んでいて、ときどき、かすかにゆらいでいるのです。

土佐、なぜ、なつかしいのだろう。

人生の半ばをすぎて、ようやくその謎が解けました。土佐は母方の川村家の父祖の地であったのです。」(「松谷みよ子の世界展」展覧会によせてより)と美しい表現で思いを語ってくれています。

今回の企画展では、松谷さんの生誕100年を記念し、松谷さんの長女で著作権者である瀬川たくみさんの構想「学び舎」をキーワードに「松谷文学の魅力」を紐解いていきます。

松谷さんは創作だけでなく、様々なテーマで鋭いエッセイも執筆してきました。そのなかには自著について語っているものもあり、作家としての姿勢を窺い知ることが出来ます。今回の展示では、松谷さんの業績だけではなく遺された珠玉の言葉も多くご紹介します。



展示資料については長野県にある黒姫童話館に協力をいただくほか、『お月さんももいろ』や『海にしずんだ鬼』に代表される土佐民話の採話・創作にも注目し、舞台となった地を取材。先人より受けつがれ、私たちの足元に脈々と流れる豊かな"土地の物語"を紹介するコーナーも設ける予定です。

同時期に開幕する「よさこい高知文化祭2026」とも連動し、ティーチャーズ・ウィークや、展示を観ながらクイズを解くイベントのほか、お正月プレゼントやスタンプラリーといった多彩な関連イベントも予定しています。県内各地で文化咲く秋、ぜひ、当館にもお越しいただき、松谷みよ子さんの豊かな世界をお楽しみください。

(学芸課／福富陽子)

好評開催中【レポート】

体感するファーブル昆虫展

令和8年7月25日(土)≫9月27日(日)





子どもたちの楽しそうな声が響く、好評の「体感するファーブル昆虫展」。

西日本では初めて開催される巡回展に、高知県立文学館ならではの派生展示も加えて、非常に興味深い内容になっています。

ロビーでは、フランスに生まれ、91歳で亡くなった博物学者・ファーブルについての年表や彼の研究の紹介をしています。ロビーを抜け、企画展示室に入ると、おそらく高知では初の展示になるファーブルの遺品(日本アンリ・ファーブル協会蔵)を展示しています。ファーブルが生まれたのは18

23年。日本は幕末で、勝海舟が生まれた年だと言えば時代を実感できるかもしれません。そんな時代に生まれた人が使っていたものを、実際に見ることができるというのは、とても貴重な機会だと思います。

また、『ファーブル昆虫記』で取り上げられたフランスの虫たちをはじめとする、世界各国の虫たちの標本は子どもたちにも大人気です。宝石のように美しいコウチュウ、きらびやかなモルフォチョウ、大きすぎるコオロギ、人の顔のようなカメムシなど、綺麗な虫、変わった虫たちもたくさん。

しかしやはり一番人気なのは、体験コーナーです。特にファーブルの気持ちになってフンチュウのつくったなし玉を探す「なし玉探し」のコーナーは人気で、なし玉以外のものも隠れているので、ぜひ探してみてください。その他、常設しているクイズも好評です。

常設展示室にある派生展示では、高知の絵本作家の横田稔さんの原画や、海洋堂の制作したファーブルのフィギュア、高知の昆虫の標本、



ファーブルに私淑した作家たちの紹介など、案外知られていないものも展示しています。

高知県立文学館の「体感するファーブル昆虫展」で楽しんだ後は、ぜひ身近な自然にも目を向けてほしいです。きっと、昆虫のいる世界が少しだけ違って見えるはず。

会期は9月27日までです。ぜひご来館ください!

(学芸課/川島禎子)

レポート

生誕１００年記念 宮尾登美子展 ～生きてゆく力～

昭和・平成を代表する、高知県出身の直木賞作家・宮尾登美子の生誕１００年を記念する展覧会が6月28日に閉幕しました。

今回のテーマ「生きてゆく力」のとおり、宮尾登美子が作家となるまでの生き様や、宮尾文学に描かれた明治、大正、昭和の女性の生き方をクローズアップしてご紹介しました。

圧倒的に女性の観覧者が多いであろうと予想していましたが、実際には男性お一人での観覧も多く、宮尾文学には男女関係なく時代を越えてひきつける強い力があることを再認識しました。

例年この時期には近隣の中学、高校から見学に来てくれるのですが、宮尾登美子展には修学旅行生も含め5校の中高生の皆さんが来館され、思い思いに展示を楽しんでくれました。愛用の着物や珊瑚などの装飾品の美しさ、豆本の精巧さにじっくりと見入る学生さん、「クレオパトラ」の原画の華やかさに心奪われたようにその空間から離れがたい様子の学生さんなど。中でも多くの学生さんが、口々に感動を伝えてくれたのは、千枚以上の直筆原稿の束の放つ圧倒的な力強さでした。原稿用紙の一マス一マスに強く濃く、端正に書かれた筆跡から、作家というプロの仕事の凄まじさや覚悟が十代の若い皆さんの心にダイレクトに伝わったように感じました。

また、団体の高校生とは別に来館された十代の方のアンケートには、「宮尾登美子の人生がすごく濃くて、かっこいい女性だなと感動した。私も自分の人生を力強く生きていきたい」と書かれていました。

今を生きる若い世代の方にも宮尾登美子という作家の生涯や作品が深い感動を与え、生きていく上での力となり得ることを確信し、宮尾登美子資料を日本一収蔵する文学館としてこれからも宮尾文学の顕彰に努めていきたいと決意を新たにいたしました。

生誕１００年記念展開催にあたり、温かいご理解とご協力を賜ったご遺族、記念講演会を快くお引き受けくださった、山本一力先生、尾形明子先生をはじめご協力いただいたすべての皆さまならびに来館者の皆様に心より御礼申し上げます。

（学芸課／岡本美和）



宮尾展観覧の様子

トピックス

図録『宮尾登美子生誕１００年　生きてゆく力』刊行のご案内

宮尾登美子生誕１００年を記念し、この度、図録『宮尾登美子生誕１００年　生きてゆく力』を刊行することとなりました。

これまで当館では度々宮尾登美子関連の図録を刊行してきましたが、今回は宮尾登美子が作家となるまでをクローズアップし、宮尾自身のエッセイや資料を中心にまとめた内容になっています。

宮尾登美子という作家を見つめるとき、その前半生がとても重要な意味を持ちます。宮尾文学の根幹をなすのは、自身の前半生を文学に昇華した『櫂』『春燈』『朱夏』『仁淀川』という自伝的四部作及びその周辺作品だからです。

宮尾は、作家としての覚悟を次のように述べています。

作家として他人の人生を描くならばその代償として、或は対比として、自分自身をあますところなく暴いてみせるのが誠意なのだと、ほとんど頑固にそう思い込んでいます。

（『春燈』あとがきより）

その覚悟の上に描かれた自伝的四部作の主人公・綾子の人生は、すべてそのまま宮尾登美子自身ではないかと思われるほど、その作品はリアリティに富み、綾子の激しい苦悩や時としてエゴイスティックな心情の吐露は、読む者の心に強く響いてきます。

しかし、小説である以上、綾子と登美子は全くのイコールではないはずですが、「自分自身をあますところなく暴く」という作家の覚悟を裏付けることができればと考え、今回の図録では作家・宮尾登美子自身の前半生に焦点をあてた内容となりました。

特にこれまであまり調査できていなかった満洲関係の資料について現段階で出来る限りの調査を試み、新たな資料を紹介することができたことは大きな成果になったのではないかと考えています。

図録『宮尾登美子生誕１００年　生きてゆく力』は令和8年9月30日刊行予定です。当館ミュージアムショップ及び通信販売にて10月以降より販売いたします。



目次

ごあいさつ
生誕１００年展に寄せて「湯梅」山本一力
第一章　宮尾登美子　その前半生
第二章　大河小説の世界～
「櫂」「春燈」「朱夏」「仁淀川」と周辺作品
第三章　女性の生き方をみつめて
第四章　めぐる季節を生きて
宮尾登美子年譜
出版目録
映像化・舞台化された宮尾作品
宮尾登美子文庫　主な収蔵資料（草稿、ノート）

販売価格　９００円（税込）

（学芸課／岡本美和）

113 土佐文学さんぽ Tosa Literature Walk

土佐日記　望京の地

京までの長い旅が続きますが、船旅が概ね進んできたようです。一行は「大湊」(南国市前浜か)から1日で「奈半の泊」(奈半利町)へ移動、停泊し、「室津」へ向かいます。今回はその途中に登場する「羽根」という地名と関連する碑を紹介します。

奈半の泊から出航したのは一月十一日の夜明け前で、昼に「羽根といふところに来ぬ」とあります。この地は現在も名が残る室戸市羽根町とされており、奈半利町に隣接した地域です。

さて、羽根についたときに子どもが「羽根といふところは、鳥の羽のやうにやある」と言い、人々が笑います。そこで別の幼い女の子が「まことにて名に聞くところ羽根ならば飛ぶがごとくにみやこへもがな」という率直な望京の思いがこもった歌を詠み、同じ思いを強く持つ人々の同情を誘います。そして子どもたちの様子を見てか人々は再び土佐で亡くした女の子を追憶し、この地を通過して行きます。

この歌が刻まれた碑が、室戸市西端の羽根岬にある国道沿いの休憩所に建っています。羽根岬はさほど突出しているという印象は受けず、日記で子どもが「羽根は鳥の羽のような所だろうか」とあどけなく連想して言いましたが、古代と現在、海上と陸上からでは見える景色も違うでしょうし、実際に鳥の羽のように見えたかもしれません。

碑がある休憩所から少し歩くと、「羽根岬」を示す看板があり、景色を望むスペースが整備されています。海が凪いでいても岩に打ちつける波の音は激しく、岩礁にいたイソヒヨドリの鳴き声も全く聞こえませんでした。そして古くから「恐ろしい」と言われる難所・室戸岬へと進むことになる一行の気持ちと「飛ぶように都へ帰りたい」という女の子が詠んだ歌への共感を覚えずにはいられません。

次なる地の室津では再び長期間停泊することになるのですが、碑とともに次回ご紹介します。

(学芸課／笠岡花菜子)



羽根岬からの景色


「土佐日記」歌碑

資料受贈報告

寄贈資料から

「旬刊朝日」1巻1号・1巻4号
「週刊朝日」1巻6号～1巻8号
赤松静太編　朝日新聞社刊
大正11（1922）年2月～4月
四六4倍判　甲藤幸哉氏寄贈

下の写真は、創刊間もない頃の「旬刊朝日」と「週刊朝日」（1巻5号より改題）です。

『朝日新聞社史　大正・昭和戦前編』（平成7年7月）によると、「旬刊朝日」は文化の大衆化という社会的背景をにらんで創刊。国内外の政治経済情勢といった記事だけでなく、暮らしや教育、趣味・娯楽に関する情報、小説・絵画など、芸術や文化に関する記事にも紙数を割いています。ページによっては総ルビとしている点からも、家庭での購読を意識し、幅広い読者に向けて発行されたことがうかがえます。



1巻1号の小説掲載面には、次号から馬場孤蝶訳・探偵小説「林檎の種」を連載する旨が予告されており、1巻4号以降の4冊に第3回、第5回～第7回の掲載を確認することができます。本誌創刊に先駆け、大正9年に博文館が「新青年」を創刊、翻訳探偵小説が好評を博し、翌年には「探偵傑作叢書」の刊行を開始。他社からも同種の翻訳叢書が出されていました。こうした状況を受け、ヨーロッパ文学の翻訳者で、海外の探偵小説の紹介者としても知られていた孤蝶に執筆の依頼があったものと推察されます。

「林檎の種」は、連載から約百年後となる令和5年8月、ヒラヤマ探偵文庫から書籍化。刊行に際し、本書の解説を書かれた湯浅篤志さんよりご献本いただきました。解説によると、本作は「旬刊朝日」1巻2号（大正11年3月）から「週刊朝日」1巻11号（同年5月）まで連載。このうち、当館では既収蔵の掲載号に加え、この度の甲藤幸哉さんからのご寄贈により、1巻2号から1巻9号（連載第1回～第8回）までを揃えることができました。書籍に続き、思いがけずその底本が到来、資料が資料を呼ぶような展開に驚くとともに、欠けていたピースが繋がるうれしい受贈となりました。

(学芸課／小松路代)

受贈報告

（令和8年5月～7月）敬称略

▼宇都宮泰然・「吉井勇・坂本石創写真」他
▼田島征彦・「ガージュー先生 対馬丸事件を生きぬいた少女の物語　たじまゆきひこ作　童心社刊」
▼有川ひろ・「Die Reisenden der Hankyu-Bahn『阪急電車』ドイツ語版　有川ひろ著　Sabine Mangold訳　hanserblau刊」
▼柴田ケイコ・「おにゃけやしき　作：大塚健太　絵：柴田ケイコ　パイインターナショナル刊」
▼祥伝社・「玉勝間 風の市兵衛 弐　辻堂 魁著　祥伝社刊」
▼湯浅篤志・「極北の秘密　ウィリアム・ウォルター・セイヤー著　馬場孤蝶訳　ヒラヤマ探偵文庫刊」
▼尾形明子・「田山花袋というカオス　尾形明子著　沖積舎刊」他
▼川口則弘・「文芸記者がいた！　川口則弘著　本の雑誌社刊」
▼松田信弘・「私的田中英光研究　松田信弘著刊」
▼窮理舎・「窮理　29号　伊崎修通編　窮理舎刊」
▼高知ペンクラブ・「高知文芸年鑑　2026年版　高知文芸年鑑編集委員会編　高知ペンクラブ刊」
▼秋元千恵子・「歌文集　想天恋　秋元千恵子著　洪水企画刊」
▼田所俊一・「合同歌集 土佐の風－現代土佐の五十五人集－　豊島未来編　萩書房刊」他
▼梶田順子・「歌集 翡翠　梶田順子著　ながらみ書房刊」
▼大場裕子・「詩集 詩生活　山形敬介著　鳥影社刊」他
▼武吉孝夫・「詩集 浮世つれづれ　武吉孝夫著　暖流舎刊」他
▼大久保せつ子・「詩集 願い　大久保せつ子著　文化企画アオサギ刊」

このほか、全国の個人・関係機関の皆様から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚く御礼申しあげます。

朗読の会紹介

「文学」を声で味わってみませんか？

文学館では月1回「朗読の会」を開催しています。取り上げる作品は、季節やテーマに合わせて3～4作品ほどです。誰もが知っている名作もあれば、これまで読む機会のなかった作品もあります。小説、エッセイ、詩や短歌と、ジャンルもさまざまです。毎回、異なる作品との出会いを楽しんでいただけるのも、この会の魅力のひとつです。

誰かの声で聞くと、文字を目で追うのとは違う印象を受けることもあります。何気なく読み過ごしていた一文や、登場人物の台詞が、声で語りかけられることによって不意に立ち上がってきます。深夜に聞くラジオのように、その声に親しみを覚えることも。声の調子や間の取り方によって、知っている作品から新しい表情が見えてくることもあります。

朗読をしてくださるのは、当館カルチャーサポーターの皆様です。会の2か月ほど前から練習を重ね、当日に臨まれます。作品をしっかりと読み込み、それぞれの個性や解釈を活かした朗読で、作品の世界へと誘ってくれます。

8月は「戦争と文学　終戦の日に想う」と題して、佐藤泰志・作「青春の記憶」、太宰治・作「貨幣」、宮川ひろ・作「おはじき」の三作品を朗読しました。一兵士の視点から描かれた作品、子どもの記憶を綴った作品など、それぞれ異なる角度から戦争を見つめた文学に、静かに耳を傾ける時間となりました。作品を通して、戦争の時代を生きた人々の思いに触れ、今ある日常や平和についてあらためて心を寄せる機会にもなったのではないでしょうか。

「朗読の会」というと少し堅そうに聞こえるかもしれませんが、どうぞお気軽にお越しいただければと思います。言葉の響きに耳を澄ませながら、一冊の本を読むのとはひと味違う文学との時間を、文学館で過ごしていただけたらと思います。

（学芸課／岩根令以子）



好評

出張おはなしキャラバン報告

今年の夏休みも、当館カルチャーサポーターのみなさんとともに、小学校児童クラブを中心に出張おはなしキャラバンに行ってきました。

児童のみなさんの元気なあいさつに迎えてもらい、キャラバンがスタート。紙芝居、絵本の読み聞かせ、クイズなどをするのですが、特に紙芝居では専用の舞台や拍子木といった道具に興味津々の様子でした。印象的だったのは聞くときは静かに聞く、合間のクイズは盛り上がって楽しむというようにメリハリがついていることです。さらにおはなしのおもしろいところは声を上げて笑ったり、大人が思いつかないようなユニークなつっこみを入れてくれたりと、こちらも笑いと刺激をもらいました。

カルチャーサポーターのみなさんは入念な準備の上、演じてくださいます。読む声色やページを繰る速さなど、細かいところから各々のこだわりを感じました。そしてただ聞かせるのではなく「伝えたい」という気持ちが表れているようで、子どもたちにもその姿勢から伝わるものがあったのではないでしょうか。

公演後に「どうしてそんなに話すのが上手なんですか？」という微笑ましい質問もいただきました。

キャラバンの合間に子どもたちと話す機会があり、「本はあまり読まない」という声も聞こえてきました。しかし、公演中の集中した様子を見ていると、根っこのところでは物語が好きなのではないかと感じました。おはなしキャラバンの体験をもとに「他のおはなしも知りたい、聞いてみたい」と興味を持っていただければ、心から嬉しいです。

最後になりましたが出張おはなしキャラバンにご依頼いただいた先生方、たくさんの児童のみなさん、同行してくださったカルチャーサポーターのみなさん、本当にありがとうございました。

（学芸課／笠岡花菜子）



ショップより

厳しい暑さの残る中、朝晩に秋の気配を感じる季節となりました。

只今文学館では『体感するファーブル昆虫展』を開催中です。

ミュージアムショップでは、ファーブル昆虫記の完訳本や昆虫図鑑、虫が登場する可愛らしい絵本などの書籍を販売しています。

コーカサスオオカブトやフンコロガシといった珍しい昆虫のぬいぐるみや、おもちゃの木の中に隠れている虫を発見できる発掘系の玩具など面白いグッズもあり、大人の方も楽しめるのでお勧めです。

人気商品は、フィギュアやバスボールです。中からどんな昆虫が出てくるか、帰宅されてからの楽しみの一つとして購入いただいています。

展示室で見られる様々な虫の中から、お好きな昆虫がグッズになっているかもしれません。展覧会とあわせて是非お楽しみくださいませ。

（総務事業課／大原良子）



館長エッセイ

「出張おはなしキャラバン」と「朗読コンクール」

館長　織田敦子

今年の夏もありがたいことに、高知県立文学館の催し物である「出張おはなしキャラバン」と「朗読コンクール」に関わらせていただくことができました。

「出張おはなしキャラバン」ではその名の通り、主に小学校の児童クラブさんに出張し、紙芝居と絵本の読み聞かせを行っています。本館のカルチャーサポーターが語る物語に熱心に耳を傾けてくれる小学生の皆さんを見ていると、子どもたちの頭の中で、物語の登場人物が動き始めて、一緒に悲しんだり楽しんだりしているのがわかります。動画は刺激的だけれどもそこに空想の入る余地は少ないように思います。やはり自分の中で登場人物を立体化し、自分が思い描く背景の中で躍動させることのできる、おはなしの時間を文学館はこれからも大切にしていきたいと思っています。

「朗読コンクール」は夏に地区予選が行われました。今年は24校の小・中学生72名が参加してくれました。何年も続けて参加してくれている児童や生徒の皆さんもおり、その成長を肌で感じさせていただけるのも朗読コンクールの楽しみの一つです。出場が決まってから何度も何度も繰り返し練習して、堂々と発表する姿に、毎年のことながら胸が熱くなります。朗読の審査員の先生方が異口同音におっしゃるのは「心を言葉に乗せる」ことの大切さです。会話文での表現の巧みさに目を奪われがちですが、地の文を正確に読む力も求められます。その表現力を支えてくれるのは、その本から何を感じ何を聴いている人に伝えたいのかという思いです。文学館の「朗読コンクール」は今年で29回目を迎えました。文学に親しむ子どもたちを育てる一助として、このコンクールを続けていきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。



高知県立文学館ニュース　第114号　令和8年9月11日発行　〒780-0850　高知市丸ノ内1丁目1番20号　電話088-822-0231　FAX 088-871-7857

好評開催中

体感するファーブル昆虫展

- 会　期　令和8年7月25日(土)≫9月27日(日)
- 開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 休館日　会期中無休
- 場　所　2階 企画展示室
- 観覧料　600円（常設展含む）
  長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料







展覧会の紹介をしています！詳しくは3ページ目をご覧ください。

次回開催

生誕100年記念
松谷みよ子展
～こころの学び舎～

- 会　期　令和8年10月17日(土)≫令和9年1月11日(月祝)
- 開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 休館日　会期中無休
- 場　所　2階 企画展示室
- 観覧料　600円（常設展含む）
  長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

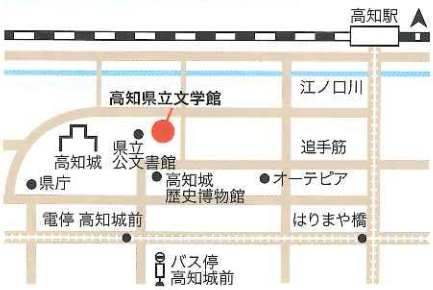


展覧会の紹介をしています！詳しくは表紙・2ページ目をご覧ください。

利用案内

開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休 館 日　年末年始（12月27日～1月1日）を除き、無休
※その他、メンテナンス等で臨時休館することがあります。
観 覧 料　企画展開催期間（常設展含む）…企画展ごとに異なります。
企画展を開催していない期間（常設展のみ）……一般400円
20名以上の団体は2割引。高校生以下無料。
身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、
戦傷病者手帳、被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者（1名）、
高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。
（窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります）
駐 車 場　なし。ただし近隣に有料駐車場があります。
附帯設備　ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、
茶室「慶雲庵」
貸出施設　企画展示室、ホール、茶室
運　　営　公益財団法人　高知県文化財団

交通のご案内



●JR高知駅から徒歩20分
（またはバス・路面電車を利用）
●バス・路面電車「高知城前」から徒歩5分
●高知龍馬空港から空港連絡バス「北はりまや橋」
下車、徒歩20分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
高知県立文学館　検索